

---

きみへ。

玲香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きみへ。

### 【Nコード】

N2034M

### 【作者名】

玲香

### 【あらすじ】

今はもう居ないきみへの手紙。

『きみ』とわたしと親友、3人の思いがわたし目線で描かれる。

絡まる想いと、嫉妬の行き先とは……？

Letter . 拝啓 きみへ。

きみへ。

もう居ないきみに、伝えたいことがある。

って言うほど大したことじゃないから大丈夫だよ。

ちよっと現実逃避したいだけ。

行動派で単純で長ったらしい文章が苦手なきみには長すぎるかもしれないけど、

頑張って短めになるようにするから。

出逢わなければよかったのかな、わたしたち。

運命だったって、今でも信じてるよ。わたしは

だけど、起こるべき運命じゃなかったよね。

起こるべきだった運命は、そう……

『きみと、わたしの親友』

あ。今、怒ったでしょ。

そんなの聞いてないって？

だって話せるわけないでしょ。

今だから言うけど、きみの彼女とわたしは親友だったの。

幼稚園からの、何でも話せる理想の親友。

……あ。また嘘がバレた？

きみはいつでも鋭かったよね。

わたしの嘘の吐き方が下手すぎるのかな。

わたしは親友のことが嫌いだった。

わたしが手に入れたいと望むものは、必ず彼女に横取りされた。

学芸会のお姫様役も、

バスケのポジションも、

授業中に寝られる窓際の席も、

お母さんたちの人気者の明るい女の子キャラも、  
きみも。

L e t t e r . 拝啓 きみへ。(後書き)

短めですみません。

初投稿で慣れてないですが、読んでいただきありがとうございます。

## Letter・2

きみのことを最初に知ったのは、そう……  
5年前のこと。

「ねえ聞いて！ あたし彼氏が出来たあ！」

「うっそ、誰々？」

「んーとね、バイトの先輩なんだけど、もう超カッコよくて！」  
いつものノロケ話。

あたしたちのグループは大抵窓際の後ろにたまっていた。

夏の日差しが、話す彼女の横顔を焼き付ける。

あたしの定位置は決まって親友の右隣。

勢い込んで話す友達の話に耳を傾けながら、時折、微笑んだ。

あたしが飽きてきたのに気付いたのか、親友はあたしに笑顔を向けたんだ。

「ね、イイコト聞きたい？」

あたしだけに聞こえるように、小声で。

ずるい、と思った。

そんな言い方されたら、聞きたくなくなるに決まってる。

普段は嫌われないように努力してるあたしでも、親友になら素で話せた。

だからこそ、この時だって。

「なに？ 教えて」

自称引つ込み思案なあたし。

いつも聞く側のあたしの精一杯の意思表示。

「ちょっとトイレ行ってくるね」

輪を作っていた友達に声をかけた親友。

え、焦らしといてそれ？

って思ったけど、親友はあたしの腕をにこやかに掴んだ。

「二人じゃないと話せないでしょ？」

例によつて、あたしにしか届かない声。

親友は人の心にスツと入っていくのが得意だ。

あたしと違つて。

トイレ……を過ぎ、屋上に続く階段を二人で上る。

確か屋上に行くのは禁止されていた筈なのに。

なんていう疑問はすぐに解決。

屋上に辿り着くまでもなく、階段の踊り場で立ち止まった。

埃っぽい空気が、秘密つて感じを醸し出してる。

親友はあたしを振り返り、イタズラっぽい笑みを浮かべた。

あたしより小さい背を伸ばして、あたしの耳に顔を近づける。

「近いつて」

「いいの。誰か聞いてるかもしれないし」

「そんなわけ……」

ないじゃん、といいかけたあたしの隣を、社会科教師が通り過ぎる。  
ほらね、とでも言いたげに笑った親友は、再び背伸びをする。

「あのね……」

「うん、なに？」

「あたし、」

彼氏が出来たんだ。

って、聞こえた気がした。

あまりに響きが軽すぎて、耳を素通りしたらしい。

「……は？」

「だからあ。彼氏が出来たの」

やっぱり、聞き間違いなんかじゃなかった。

羨望よりも何よりも、先を越された、って思った。  
何でだろう。

あたしなんかより、親友の方がモテるってことは分かってる筈なのに。

何でも一緒にクリアしてきたから、なのかな。

産まれたときからずっと一緒だったのに。

僅かな違いのように見えるけど実はその奥に潜む大きすぎる違い。

「あ、信じてないでしょ。写メ見せてあげる」

目の前に親友のケータイの画面。

確かに親友が一目ぼれしそうな外見の男。

悔し紛れに、この男の顔でも覚えててあげよう。



「どこの人？」

「他校なんだけどね、ほら、あの南高校なんだって」

「ナンパってやつ？」

「違うよお、ちゃんと知り合ったの」

ちゃんとしてというのがどういうのか、あたしには想像もつかない。  
別に羨ましいんじゃない。

不思議なだけ。

恋って、そんなに容易くしてもいいものなんだ。

って、この時はまだ他人事だったんだけど。

## Letter・2（後書き）

えーと。2話目。

読んでいただきありがとうございますっ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2034m/>

---

きみへ。

2010年10月28日05時58分発行